『ジェーン・エア』における vision の力

—— シャーロット・ブロンテの想像力の表現について ——

川　北　天　華

京都大学大学院　共生人間学専攻
〒 606-8501　京都市左京区吉田二本松町

要旨　Charlotte Brontë の『ジェーン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）は出版当初から傑作として高く評価された一方，話の展開が不自然，また主人公 Jane の行動が不自然で一貫性がないといった批判がなされてきた．特に，Jane が一度 Rochester の元を去りながら，ある日突然遠く離れた彼の呼び声を聞き，彼のもとに戻って結婚するという筋書きには反発が多い．これらの批判は Jane の行動原理が正しく理解されていないことに起因する．本稿では，Jane の行動原理を分析する手掛かりとして，第 12 章で彼女が口にする“power of vision”という表現に注目し，この vision の力こそが Jane の求めるものであり，Rochester との結婚がその願望を充足させるという仮説を立てる．ここでの vision は従来視覚の意味で捉えられてきたが，本稿ではこれに留まらず，予示，想像という別の解釈を導入する．これにより，Jane の行動は一貫して不思議な予示の力に導かれていること，また，彼女の成長は作者 Charlotte Brontë の想像力の表現の発展と呼応していることが示される．Jane が Rochester と結婚するのは，彼とならば彼女が求めていた vision の共有が叶うからであり，またそれは，読者と vision を共有したいという作者本人の欲求に根差すものである．

序

Charlotte Brontë の『ジェーン・エア』（*Jane Eyre*, 1847）は，その力強くドラマティックなプロットが読者の心を掴み，出版後すぐにベストセラーになった．しかし一方で，話の展開が不自然で，登場人物の行動に一貫性がない，との批判もまた多かった[1)]．

特に批判を浴びやすいのは，第 35 章，Thornfield を出て Moor House で暮らしていた Jane が，ある日突然，どこからともなく Rochester の呼び声を聞き，彼のもとに戻ってくるという場面である[2)]．この出来事は，確かに超自然的で，リアリズムでは説明がつかない．また，Bertha の存在を隠されていたことに失望し，一度は Rochester のもとを離れたはずの Jane が，結局彼のもとに帰ってくる，という筋書きも，「自分の力で道を切り開く女性」という理想化された Jane の姿と矛盾を成すように思える．このあたりが，当時の批評家から「一貫性がなく現実的でない（gross inconsistencies and improbabilities）」（Rigby 502）と攻撃されたゆえんだろう．今日でも，Rochester と結婚するという Jane の最後の決断について，評価は分かれている[3)]．Sutherland の言葉を借りるならば，問題はこうだ．「ジェーン・エアは幸せになれるか？（Can Jane Eyre be happy?）」（Sutherland 68）

本論の目的は，そのような懐疑的な問いに対し，Yes と答えることである．そもそも，Jane の行動が不自然で一貫性がないと批判されるのは，彼女の行動原理が正しく理解されていないからではないか．Jane が人生において何を求め，何をもって幸せと感じるのか，今一度分析する必要がある．もし Rochester との結婚が彼女の願望を充足させるものであるならば，確かに「幸せな結末」とい

えるはずだ.

Jane の行動原理を分析する出発点として，本論では，第 12 章，Jane が Rochester に初めて会う直前の，以下の場面に注目する.

> Anybody may blame me who likes, when [. . .] I climbed the three staircases, raised the trap-door of the attic, and having reached the leads, looked out afar over sequestered field and hill, and along dim sky-line — that then I longed for a power of vision which might overpass that limit ; which might reach the busy world, towns, regions full of life I had heard of but never seen [. . .]（*JE* 129 以下全て下線は筆者による）

Thornfield の屋上で，Jane は「限界を超えるような vision の力（a power of vision which might overpass that limit）」を強く求めている．そしてこの直後，あたかもこの欲求への回答のように，Jane は Rochester と運命的な出会いをすることになる．したがって，この“power of vision”こそが Jane の求めるものであり，Rochester との結婚がその願望を充足させる，というのが本論の仮説である.

では，この“power of vision”とはいったい何を意味するのか．もちろん単に「遠くを見る力」くらいに捉えても意味は通る．しかし，言うまでもなく，vision という語は多義語である．そこで，本論では，「視覚」（eyesight）にとどまらず，「予示」（prophecy）や「想像」（imagination）といった別の解釈を検討したい.

1. The Power of Eyesight

はじめに，最も一般的な「視覚」（eyesight）の意味を検討しよう．Jane が求める“power of vision”が「見る力」だとする解釈である.

伝記的な話をするならば，Charlotte Brontë は極度の近視であったし，父 Patrick Brontë も目が悪かった．その上，『ジェーン・エア』が書かれたのは白内障の手術を受けた Patrick の介護中だったというから，Charlotte が自分の抱えていた視力に関する問題を小説に反映した，という可能性は十分に考えられる.

また，単に Charlotte の個人的な問題だけでなく，その時代の社会的関心もまた，「視覚」に向けられていた．当時の観相学（physiognomy）[4] の流行は，『ジェーン・エア』にも色濃く影を落としている.

たとえば，Jane と Rochester の最初の会見の場面で，Jane は次のように Rochester の顔の特徴を分析している.

> The fire shone full on his face. I knew my traveller, with his broad and jetty eyebrows, his square forehead, made squarer by the horizontal sweep of his black hair. I recognized his decisive nose, more remarkable for character than beauty ; his full nostrils, denoting, I thought, choler ; his grim mouth, chin, and jaw — yes, all three were very grim, and no mistake. His shape, now divested of cloak, I perceived harmonized in squareness with his physiognomy.（*JE* 141）

このように顔の特徴を仔細に描写することは，Charlotte Brontë 作品の特徴でもある．Charlotte が観相学に凝っていたことは，彼女の残した人間の鼻や目の克明なスケッチ[5] からも窺い知れる．Jane や Rochester も立派な観相学者で，たびたび相手の顔つきを観察し合っている．しかし，上手（うわて）なのは Rochester の方だ.

> ‘And so may you［Rochester］,’ I thought. My eye met his as the idea crossed my mind : he seemed to read the glance, answering as if its import had been spoken as well as imagined—（*JE* 158）

上記引用のように，Rochester は，Jane の考えを目から読み取ることができるかのようなそぶりを見せる．実際，彼は「ところで，君がその器官（目）を使って表現しているものに気をつけなさいよ．私はその言葉を解釈するのが速いからね（beware, by the by, what you express with that organ

［Jane's eye］; I am quick at interpreting its language.）」（*JE* 159）と，直接 Jane に警告しさえする．

Jane と Rochester は，視覚を通して通じ合う――あるいは，競い合う．しかし Jane はそのゲームに勝つことができない．なぜなら，Rochester は隠すことに長けているのに対し，Jane はそうではないからだ．

> '［D］o you think me handsome?'
> I should, if I had deliberated, have replied to this question by something conventionally vague and polite ; but the answer somehow slipped from my tongue before I was aware, 'No, sir.'
> 'Ah! By my word! There is something singular about you,' said he［. . .］（*JE* 154）

このように，Jane は元来正直な性格で，しばしば本心を包み隠さず告げる．その率直な物言いこそが，Rochester を惹きつけるのである．

正直さが Jane の特質なら，Rochester はその逆だ．「隠す・偽る」（disguise）という彼の性質は，作中繰り返し強調される．たとえばシャレードの場面では彼はムスリムの恰好をしているし（*JE* 213），ジプシーの老女を偽って女装することすらあった（*JE* 227）．Jane に最初に求婚する場面でさえ，彼の顔は闇に包まれている．

> 'You, Jane, I must have you for my own ― entirely my own. Will you be mine? Say yes, quickly.'
> 'Mr Rochester, let me look at your face : turn to the moonlight.'
> 'Why?'
> 'Because I want to read your countenance ― turn!'
> 'There! you will find it scarcely more legible than a crumpled, scratched page. Read on : only make haste, for I suffer.'
> ［. . .］'Oh, Jane, you torture me!' he exclaimed.（*JE* 294）

ここで，Rochester は Jane に顔を見せたがらない．「見て読み取る」ことを豪語していた Rochester だから，逆に自分の顔を「見られ，読み取られる」ことを恐れていると考えられるだろう．求婚に際し，自分の秘密，つまり自分には既に Bertha という妻があることを，Jane に知られたくないからだ．だから，顔を隠そうとする．Jane は後になって，「月は沈んでいなかったのに，私たちはすっかり闇の中にあった．あんなに近くにいながら，主人の顔がほとんど見えなかった（The moon was not yet set, and we were all in shadow : I could scarcely see my master's face, near as I was）」（*JE* 295）と述べているから，実際この場面で彼女には Rochester の顔が見えていなかったことが分かる．そのために，Jane は結婚式の当日になるまで Rochester の秘密に気づくことができない．

簡単に言えば，Jane は Rochester を見ることができないのに，Rochester の方は Jane を見ることができる．「見られずに見る」という，ベンサムのパノプティコンのような特権的立場が，二者の間にヒエラルキーを作るのである．

「視覚」をめぐるこの不平等な構造は，当然，当時の家父長制下における男女間格差の問題に容易に結びつく．例えば，Bellis は以下のように論じている．

> In Jane Eyre, sexual and social power is visual power. The struggle between Jane and Rochester is embodied in a conflict between two different modes of vision : a penetrating male gaze that fixes and defines the woman as its object, and a marginal female perception that would conceal or withhold itself from the male.（Bellis 639）

このようなフェミニズム的な見方はある程度妥当なように思える．というのも，第 12 章で "power of vision" が欲しいと述べた直後に，Jane のフェミニスト宣言として有名な以下の文章が始まるからだ．

> Women are supposed to be very calm generally : but women feel just as men feel ; they need

> exercise for their faculties [. . .] and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags.（*JE* 129–30）

1970 年代，『ジェーン・エア』はフェミニズム批評に盛んに取り上げられた．最も有名なものは Gilbert と Gubar による『屋根裏の狂女』（*The Madwoman in the Attic : The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*, 1979）だろう[6]．屋根裏に閉じ込められた Bertha は実は Jane の闇の分身であり，男性中心の世界で抑圧された女性の怒りや不安を表している，といった読み方は，それまでの邪悪な Bertha 像を覆すと同時に，『ジェーン・エア』を家父長制における女性の理想像から脱却を試みる女性作家の作品として印象づけた．

家父長制下において，Jane たち女性は，「家庭の天使（The Angel in the House）」として家や狭い部屋に閉じ込められ，社会的自立を妨げられている．「視覚」という文脈でいえば，女性は外に出て広い世界を「見る」ことを禁じられている，と言い換えることができるだろう．逆に，男性である Rochester は一方的に「見る」自由を有しており，それが家父長的権威や支配と繋がっているのである．

確かに，Jane は外を見たがる女性である[7]．たとえば，Lowood にいたころ，環境を変えたがっていた Jane は以下のように発言している．

> I went to my window, opened it, and looked out. [. . .] My eye passed all other objects to rest on those most remote, the blue peaks ; it was those I longed to surmount ; all within their boundary of rock and heath seemed prison-ground, exile limits. I traced the white road winding round the base of one mountain, and vanishing in a gorge between two. How I longed to follow it farther!（*JE* 101）

窓辺で外を眺めている Jane は，遠くに見える山の頂を「乗り越えたい（I longed to surmount）」と願う．「牢獄の中（prison-ground）」にいるようだという感覚は，実際に監禁されている Bertha の気持ちを代弁するかのようだ．

このような文脈においては，Jane が求める “power of vision” は「自由に『見る』権利を得ること」と解釈できるだろう．フェミニズム的に敷衍すれば「家に閉じ込められていた女性が解放され，社会的に自立すること」である．

一方，Rochester が火事で片腕と両目の視力を失うことについては，Jane に真実を隠し，重婚の罪を犯そうとしていた Rochester への試練，あるいは罰と考えられることが多い．とりわけ失明に関しては，精神分析的にセクシュアリティと結びつけられやすく，たとえば Chase は視覚を性的エネルギーと結びつけ，Rochester の失明は象徴的去勢だと論じている（Chase 25）．

Rochester は，視覚を失うことで，それまで一方的に振りかざしていた男性的権威を削がれる．それに対し，Jane は Moor House で財産と家族を得，求めていた社会的自立を手に入れる．そうなって初めて Jane と Rochester との間の不平等が解消され，ようやく二人は結ばれる．フェミニズム的に読むなら，こういった筋書きになるだろう．

しかし，Jane がフェミニズムを行動原理としている，つまり，単に「女性として自立してもっと遠くを見に行きたい」という欲求だけで動いていると考えると，説明のつかない部分が出てくる．

ここで二つの問いを提示したい．第一に，Jane は何故，結末で Rochester のもとに戻ってくるのか？　広い世界を見に行きたいのなら，St John との伝道生活の方がよほどふさわしいはずだ．また，Jane は Rochester のもとに戻ろうと決意したとき，Thornfield の火事をまだ知らなかった．よって，「Rochester が火事で失明したことで二人の平等が叶い，それが理由で Jane は Rochester のもとに戻ってきた」といった読み方は本文に沿っていないように思われる．第二に，Rochester の視力回復は何を意味するのか？[8] Rochester の失明を罰だとするならば，結婚後，彼の視力が回復することをどう解釈すればいいのか．

以上のように，Jane の行動はフェミニズムだけでは十分に説明できない．以降の章では，vision について「視覚」以外の解釈を検討する中で，この二つの問いに答えていく．

2. The Power of Prophecy

Jane はなぜ，一度は離れた Rochester の元に戻ることを決めたのか．その問いに答えるため，この章では vision を「予示」（prophecy）の意味で捉える．

Jane の帰還の理由について，テキストではどのように説明されているのだろうか．Jane は Thornfield を出て辿り着いた Moor House で，厳格な牧師 St John から愛のない結婚を迫られる．一度は拒絶したものの，彼の氷のような迫力に押され，Jane は今にも結婚を承諾しそうになる．その瞬間，彼女はどこからともなく，不思議な呼び声を聞くのである．

> I contended with my inward dimness of vision, before which clouds yet rolled. I sincerely, deeply, fervently longed to do what was right ; and only that. ‘Show me, show me the path!’ I entreated Heaven.
> […] I saw nothing, but I heard a voice somewhere cry—‘Jane! Jane! Jane!’—nothing more.
> […] And it was the voice of a human being—a known, loved, well-remembered voice—that of Edward Fairfax Rochester […].
> ‘I am coming!’ I cried. ‘Wait for me! Oh, I will come!’（*JE* 482–83）

厳密に言えば，この声こそが，Jane が Rochester のもとに戻ることにした理由である．「何も見えなかった（I saw nothing）」と述べられている通り，ここでは視覚は一切作用していない．Jane の心の中の vision は，「視覚」ではなくむしろ「予示」，つまり迷う Jane に選ぶべき道を示すお告げのようなものである．

実はこの場面に限らず，Jane は居場所を変えるたび，自分ではない何か超自然的な力に導かれていた．たとえば，Jane にとっての最初の移動，Gateshead から Lowood 校に入れられるきっかけとなったのは，赤い部屋で不思議な動く光を見たことだった．

> I can now conjecture readily that this streak of light was, in all likelihood, a gleam from a lantern, carried by someone across the lawn : but then, prepared as my mind was for horror, shaken as my nerves were by agitation, I thought the swift-darting beam was a herald of some coming vision from another world.（*JE* 21）

幼い Jane はこの光を恐れ，錯乱状態になった後に失神してしまう．駆け付けた医師が転地の必要を勧めたことが，彼女が Lowood 校に入れられる大きな要因となった．

次に，Lowood から Thornfield への移動では，vision の導きはより直接的になる．Jane は新しい職を探そうと考えるが方法が見つからず，悩みながら床に就く．

> A kind fairy, in my absence, had surely dropped the required suggestion on my pillow, for as I lay down it came quietly and naturally to my mind :
> ‘Those who want situations advertise : you must advertise in the — shire Herald.’
> ‘How? I know nothing about advertising.’
> Replies rose smooth and prompt now —
> ‘You must inclose the advertisement and the money to pay for it under a cover directed to the editor of the Herald. […]’（*JE* 103）

すると，このように Jane は突然広告を出すことを思いつく．まるで妖精が本当にやってきて，Jane には知りえない情報を示したかのようだ．

さらに，次の段階，Thornfield を去る際に現れる vision は際立って印象的である．Rochester が妻帯者であったことが発覚し，Jane は深くショックを受ける．そんなとき，夢うつつに見た「月の母」の vision が，誘惑から逃れよと命じる

のである．

> I dreamt I lay in the red-room at Gateshead ; that the night was dark, and my mind impressed with strange fears. The light that long ago had struck me into syncope, recalled in this vision, seemed glidingly to mount the wall, and tremblingly to pause in the centre of the obscured ceiling. I lifted up my head to look : the roof resolved to clouds, high and dim ; the gleam was such as the moon imparts to vapours she is about to sever. [. . .] [T]hen, not a moon, but a white human form shone in the azure [. . .]. It gazed and gazed on me. It spoke to my spirit : immeasurably distant was the tone, yet so near, it whispered in my heart—
> 'My daughter, flee temptation.'
> 'Mother, I will.'（*JE* 367）

Jane は自分の気持ちに抗い[9]，Thornfield を後にする．Jane はまたも，vision の忠告に従うのである．そして最後に Moor House では，前述のように，Rochester の声が彼女を Ferndean に呼び寄せる．

このように，Jane が迷うたびにどこからともなく現れて，これから行くべき道，未来を指し示す「予示」の力．これこそが，Jane の求める "power of vision" と考えることはできないだろうか．Jane を人生の次のステージに進めるのはいつも vision であり，Jane はその導きに従う．つまり，この vision こそ，Jane の行動原理なのである．

Jane は vision の導きに従って各地を転々とし，最終的にゴール —— Rochester の暮らす Ferndean —— に到達する．では，なぜ Rochester なのか？

Jane は "power of vision" を信じている．そして自分が信じるだけでなく，それを周りの人に伝えようとする．第 13 章で Jane が Rochester との最初の面会で彼に見せる三枚の空想画（*JE* 147–48）[10] はその一例だろう．一枚目の嵐の海の絵には，溺死体や海鳥，難破船など不吉なモチーフがちりばめられ，Jane の未来が Thornfield という不吉な場所で脅かされることを示唆するように読める．二枚目の宵の明星の絵は Jane を導く「月の母」のイメージにそっくりだし，三枚目の氷山と片目しか見えない頭の絵は，Jane を失い盲目になる Rochester を表していると解釈できる．つまりこれら三枚の絵は，未来を示す vision を，Jane が絵画の形で表現したものといえるだろう．そして彼女は「この空想画を描いているとき，今までで一番の幸せを感じた（To paint them, in short, was to enjoy one of the keenest pleasures I have ever known.）」（*JE* 148）のだという．

Jane は "power of vision" を信じ，それを表現することに喜びを覚える．しかし，その表現がいつでも他人に信じてもらえるとは限らない．先述のように，Jane は幼いころ Gateshead で赤い部屋に閉じ込められた際，不思議な光を見て錯乱状態に陥るが，使用人に「光を見た（I saw a light）」と訴えても「わざと叫んだのよ（She has screamed out on purpose）」と取りあってもらえなかった（*JE* 21）．使用人だけではない．Reed 伯母さんもまた，Jane の言葉を信頼せず，そればかりか，Lowood 校の監督 Brocklehurst に Jane の「嘘をつく癖（a tendency to deceit）」を矯正するよう依頼しさえする（*JE* 41）．後に Lowood 校の他の生徒の前で Brocklehurst に「嘘つき（a liar）」と呼ばれたこと（*JE* 79）は，心の傷となって長く Jane の中に残ることになる．

前述のように，Jane は元来正直な性格であるにもかかわらず，幼い Jane が繰り返し「嘘つき」と呼ばれることは注目に値する．幼少期の Jane の言葉が信頼されない理由については後述するが，ともかく，Jane はなかなか他人と vision を共有できないのである．だからこそ，三枚の空想画を見せたとき，Rochester が理解の兆候を示したことは，Jane にとって特別な意味を持っただろう．

> "[Y]ou have secured the shadow of your thought ; but no more, probably. [. . .] yet the drawings are, for a school-girl, peculiar. [. . .] And who taught you to paint wind? There is a high gale in that sky, and on this hill-top. Where did you see Latmos? For that is Latmos. [. . .]"（*JE* 148）

このように，Rochester は Jane の描いた空想画に興味を示し，多少ひねくれた言い方ではあるが，彼女の腕を褒めている．Jane の vision を認めてくれる初めての男性だった．勢い，この面会の後，Jane は Rochester に興味を抱き始め，恋に落ちるのである．

しかし，思いが通じ合った後，結婚を控えた Jane の前に Bertha の影がちらつくようになると，Rochester の態度が変わる．

> ‘I［Jane］[. . .] felt that though enfeebled I was not ill, and determined that to none but you would I impart this vision. Now, sir, tell me who and what that woman was?’
> ‘The creature of an over-stimulated brain ; that is certain. [. . .]’（*JE* 327）

Jane は Rochester にその後の予兆となるような不吉な夢の話をした後，誰かが部屋に入ってきて婚礼衣装のヴェールを引き裂いたと告げるが，Rochester は幻だと言ってこれを否定する．

もちろん Rochester は，Jane に Bertha の存在を知られたくないがために，わざとこのような発言をしたのだろうが，結果的には Reed 伯母さんや Brocklehurst と同様，Jane の話を信じないような態度をとってしまった．結局この後 Bertha の存在は暴かれ，Jane は例によって自分にしか見えない vision の導きによって Thornfield を離れることになる．

ところが，第 35 章で Jane が聞いた，例の Rochester の呼び声だけは，これまでの vision と決定的に違う．そしてその違いこそが，「Jane はなぜ Rochester のもとに帰ることにしたのか」という問いの答えに繋がっていると考える．Jane が帰ってきた後，Ferndean での Rochester の発言に注目したい．

> ‘As I exclaimed “Jane！ Jane！ Jane！” a voice ― I cannot tell whence the voice came, but I know whose voice it was ― replied, “I am coming : wait for me,” [. . .] I and Jane were meeting. In spirit, I believe, we must have met. [. . .]’
> Reader, it was on Monday night ― near midnight ― that I too had received the mysterious summons : those were the very words by which I replied to it.（*JE* 515–16）

Rochester の語るところによれば，あの日，全く同じ時刻に，Rochester もまた Jane の声を聞いたのである．これは明らかに，これまでの vision にはなかったことだ．Jane の vision が Rochester を示したとき，Rochester の vision もまた Jane を示していた．二人が「vision を共有した」[11] と言い換えることもできるだろう．

vision は「予示」，つまり未来を示すものだと考えれば，「vision の共有」とは未来の共有である．そして未来の共有とは，二人の将来の和合・すなわち結婚に他ならない．

Jane が Rochester のもとに帰って来たのは，vision の示す先に，それを受け入れてくれる人がいたからだ．Rochester とならば vision を共有でき，Rochester としか共有できないから，Jane は Rochester を選んだのである．

3. The Power of Imagination

ここからは，「vision の共有」を軸に，作品から作者 Charlotte Brontë へと論を広げる．主人公である Jane に vision，すなわち彼女の未来を指示し，物語を進行するのは，もちろん作者 Charlotte であるからだ．あるいは Charlotte の想像力と言ってもよいかもしれない．この章では，vision を「想像」（imagination）の意味で捉え，二つ目の問い ―― Rochester の視力回復は何を意味するか？ ―― に答える．

『ジェーン・エア』を，作者 Charlotte Brontë の半自伝的作品として読むことは，もちろん可能である．Jane と Charlotte の人生には，多くの類似点があるからだ．たとえば，Lowood 校は Cowan Bridge の Clergy Daughters’ School，Helen は Maria Brontë，Rochester は Constantin Héger などと比較されてきた[12]．Jane が Charlotte 自身の投影であるならば，二人は似た価値観を持っているはずだ．Jane の求める “power of vision” が Charlotte に

とっては何を意味していたのかを分析するため，議論は再び絵画に戻る．

Jane と同じく Charlotte も絵が非常に上手だったことはよく知られている．しかし，この時代，創造的な行為はまだ男性のものとされており，女性は模写こそすれ，空想画を描く自由はなかった（杉村　261）．たくさんの絵を描き残している Charlotte も，本格的な絵画教育を受けるようになってからは，空想画は一枚も描かず，もっぱら模写に専念している．一方，Charlotte の弟 Branwell は空想豊かな物語絵を残している[13]から，姉弟間にも確かに男女の差があったことが分かる．

しかし Charlotte は単なるコピーで満足していたわけではない．彼女はイマジネーションの力を強く自覚していた．下に示すのは Charlotte が G. H. Lewes に送った手紙である．

> Then too, Imagination is a strong, restless faculty which claims to be heard and exercised, are we to be quite deaf to her cry, and insensate to her struggles? When she shews us bright pictures are we never to look at them and try to re-produce them? — And when she is eloquent and speaks rapidly and urgently in our ear are we not to write to her dictation?（*SL* 91）

ここで Charlotte は，イマジネーションは絵を見せると同時に言葉でも語りかけてくると述べている．幼いころ，自作の物語に地図や挿絵をつけて遊んでいた Charlotte にとって，絵画と物語とは，本来分かちがたく結びついていたのである．

絵画において想像力を発露させることを禁じられた Brontë が，そのはけ口を求めたのが小説だと考えられる．1844 年以降，Charlotte はほとんど絵を描いていない[14]が，それに成り代わるように，1846 年には『カラー，エリス，アクトン・ベル詩集』（*Poems*, 1846）を，1847 年には『ジェーン・エア』を出版している．このことが示すのは，Charlotte のイマジネーションの欲求は絵画から小説へと，徐々にその方向を変えて行ったということである．

もちろん，小説の世界にも男女間格差はあった．Charlotte は 1836 年に Robert Southey[15]に手紙を送り，自分の送った詩について意見を求めている．しかし返事はこうだった――「文学は女性の生涯の仕事たりえないし，そうなるべきでもない（Literature cannot be the business of a woman's life : & it ought not to be.）」（*SL* 10）

それでも Charlotte は書くことをやめられなかった．彼女はついに，二人の妹たちと共に，男性の名前を使って小説を出版する．もちろん，Charlotte の著作への情熱は，一部は経済的な要因によるものだろう．なにしろ，目の病気を抱えた父と放蕩者の弟，引きこもりがちな妹たちを養う必要があったのだから．しかしながら，イマジネーションの力もまた，創作の強いモチベーションになっていたに違いない．それは以下のような Charlotte の発言を見るとよく分かる．

> The standard heros and heroines of novels, [. . .] take an interest, believe to be natural, or wish to imitate : were I [Charlotte] obliged to copy these characters, I would simply — not write at all. [. . .] [U]nless I can look beyond the greatest Masters, and study Nature herself, I have no right to paint ;（*SL* 118）

模写ばかりしていた反動のように，Charlotte は小説において既存のキャラクターのコピーはしたくないと主張する．Charlotte が Jane Austen の『高慢と偏見』を読み，「ありふれた顔を銀板写真で撮った肖像画（an accurate daguerreotyped portrait of a common-place face）」（*SL* 99）と批判したことは有名だが，Charlotte に言わせれば，小説には迸る想像力が不可欠なのであって，ありのままを写し取った肖像画であってはならないのである．

また，引用部後半の下線部の「向こう側を見る（look beyond）」という表現は非常に興味深い．前述の「限界を超えるような vision の力が欲しい（I longed for a power of vision which might overpass that limit）」「乗り越えたい（I longed to surmount）」「どこまでも遠くへ行きたい（How I longed to follow it farther!）」といった Jane の発言と似通っているからだ．つまり Jane の求める“power of

vision”は，作者 Charlotte のイマジネーションの欲求に根差しているのではないか．

それでは，「限界を超える（overpass that limit）」とは何を意味するのか．前述のように，絵画においても小説においても，男女の間に格差があった．limit とは男女の間の壁なのだろうか？　一つにはそうかもしれない．が，Charlotte が小説家であることを考えれば，別の解釈もできるのではないか．第 12 章で，Jane がこのように述べていることに注目したい．

> Then my sole relief was to walk along the corridor of the third story, backwards and forwards, safe in the silence and solitude of the spot, and allow my mind’s eye to dwell on whatever bright visions rose before it ― [. . .] and, best of all, to open my inward ear to a tale that was never ended ― a tale my imagination created, and narrated continuously ; quickened with all of incident, life, fire, feeling, that I de-sired and had not in my actual existence.（*JE* 129）

“power of vision”の発言と Jane のフェミニスト宣言との間に挟まれた箇所にもかかわらず，多くのフェミニズム批評はこの部分を見落としている．しかし，ここで Jane がまるで Charlotte に乗り移られたかのような発言をしていることは看過できない．

ここの bright vision とは，「視覚」でも「予示」でもなく，Jane の「想像」を意味すると思われる．また，「心の眼（my mind’s eye）」，「内なる耳（my inward ear）」とあるように，彼女の vision は元来内向きであることが分かる．よって，Jane が「限界を超える」とか「乗り越える」とか「向こう側を見る」とか言うとき，それは必ずしも外向きの視線を意味しない．確かに Jane は外に出て広く世界を見たいと思っているのだろう．しかしそれと同じくらい，心の内側に集中したいとも考えているのだ．

さらに，Jane が心の眼を注ぎ，内なる耳を傾けるのは，「想像の作り上げた物語（a tale my imagination created）」なのだという．Jane の一人称ながら，作者 Charlotte の筆跡が強く感じられる部分である．また，これが Bertha の閉じ込められている Thornfield の三階の廊下で進行しているというのも面白い．「閉じ込められている」という感覚は，単に女性の社会的自立のみならず，Charlotte の表現の自由への渇望とも繋がっているといえる．

このように考えると，“power of vision”に「内なる想像を表現する力」という新たな解釈を付け加えることができるだろう．実に，『ジェーン・エア』は Jane の自己表現の獲得と成長の物語でもある．

Jane は作品の冒頭で Reed 伯母さんに「愉快に口を利けるようになるまで黙ってらっしゃい（[U]ntil you can speak pleasantly, remain silent.）」と命じられ（*JE* 10），発話を禁じられている．実際，幼い Jane は気性が荒く，自分の感情を正しく分析できないため，Reed 伯母さんの言うように「愉快に口を利く」ことができない．幼少期の Jane が頻繁に嘘つき呼ばわりされるのは，彼女の自己表現が未熟だからかもしれない．

幼い Jane は，言葉の代わりに絵画に頼る．「黙ってらっしゃい」と命じられた後，Jane は Bewick の『英国鳥禽史』を読み始める（*JE* 11）．「それぞれの絵が物語を語っていた（…）．ビューイックの本を膝の上に置き，私は幸せだった（Each picture told a story［. . .］. With Bewick on my knee, I was then happy）」（*JE* 11）そう語る Jane にとって，挿絵の中の冷たく荒涼とした光景は，いわば，自分の気持ちの代弁であった．まだ言葉が上手く扱えない Jane は，絵画に自己を投影することで安らぎを得るのである．

Jane はあるとき，冷酷な仕打ちに耐えかねて，Reed 伯母さんに強い言葉で反論する．しかし，感情のままに怒鳴り散らしても，得られるものは「後悔の痛みと反動の寂しさ（the pang of remorse and the chill of reaction）」だけ（*JE* 45）だった．

感情の抑制と語りの教化は Lowood 校で同時進行する．Lowood で出会った心優しい少女 Helen は，Jane の荒々しい物言いをたしなめる．

> I proceeded forthwith to pour out, in my own way,

> the tale of my sufferings and resentments. Bitter and truculent when excited, I spoke as I felt, without reserve or softening. [. . .]
> 'Well,' I asked impatiently, 'is not Mrs Reed a hard-hearted, bad woman?'
> '[. . .] Would you not be happier if you tried to forget her severity, together with the passionate emotions it excited? Life appears to me too short to be spent in nursing animosity, or registering wrongs. [. . .].' (*JE* 69)

Helen の言うように，Jane は激しい気性を押さえ，適切な表現法を学ばなければならない．さもなければ Gateshead での失敗を繰り返すことになってしまうだろう．ほどなくして，Jane は試験を受けることになる．Brocklehurst に「嘘つき」と呼ばれたことに対し，Temple 先生に弁解を求められるのだ．

> '[. . .] You have been charged with falsehood ; defend yourself to me as well as you can. Say whatever your memory suggests as true ; but add nothing and exaggerate nothing.'
> I resolved in the depth of my heart, that I would be most moderate — most correct ; [. . .] and mindful of Helen's warnings against the indulgence of resentment, I infused into the narrative far less of gall and wormwood than ordinary. Thus restrained and simplified, it sounded more credible : I felt as I went on that Miss Temple fully believed me. (*JE* 84)

Temple 先生は Jane に，誇張なく正しく事実を説明することを求める．そこで Jane は，Helen に言われたように，感情を抑制して簡潔に話すよう努め，そのおかげで，Temple 先生の信頼を勝ち得ることができた．言い換えれば，彼女は自分の感情を言葉で適切に伝える方法を学んだのである．興味深いことに，この後 Jane はフランス語と絵画を学ぶことを同時に許可される（*JE* 88）．絵画に自己投影していただけの Jane が，言葉と絵画の両方で，自ら表現する方法を学び始めたのである．幼いころの Charlotte のように，この段階では，自己表現において，絵画と言葉は不可分だといえる．そして後になって，この絵画が，Jane と Rochester との最初の面会を媒介することになる．

しかし，Thornfield で Rochester と頻繁に会話を交わすようになると，もはや Jane は絵に頼ってはいられない．Rochester の機敏な会話に必死でついていく中で，Jane の語りの能力は成長する．かつて Rochester に絵を見せた際には「私は何も申しません（Then I will say nothing,）」(*JE* 146）と言っていた Jane が，Bertha の襲撃に遭った後には，「聞いてください（Then, sir, listen.）」(*JE* 322）と自分の言葉で語り始める．今や彼女は絵画の助けなしに，言葉で伝えたいことを表現できるようになったのだ．

そして最後に Rochester が失明すると，必然的に，言葉だけが二人の伝達手段になる．Rochester の眼の代わりになって，周りの風景を言葉で伝える中で，Jane の語りは成熟する．

> 'You shall not get it out of me to-night, sir ; you must wait till to-morrow ; to leave my tale half told, will, you know, be a sort of security that I shall appear at your breakfast-table to finish it. [. . .]' (*JE* 505)

このように，Ferndean での Jane は，まるでアラビアンナイトのシェヘラザードのように，あえて語りを留保したり，編集したりすることができるようになっている．「読者よ，(Reader,)」と Jane が読者へ呼びかける回数は，冒頭よりも巻末の方がはるかに多くなっている（Sternlieb 476）が，これは彼女の語り手としての成長の証かもしれない．このような過程を経て，最終的に，彼女は『ジェーン・エア』という自叙伝の作者となるのである．

Jane は絵画から言葉へと，表現を進化させていく．これは Charlotte が絵画から小説へと vision の表現法を変えて行ったプロセスと呼応している．Jane を導く vision が，最初はものいわぬ光の形で現れ，最後には逆に，姿のない声だけの形になる

のも，これに対応していると考えることができるだろう．

Charlotte の話に戻ろう．議論は一周し，ここで再び「視覚」の問題に戻る．興味深いことに，Charlotte にとって，書くことと見ることは無関係ではなかった．以下に引用するのは Roe Head Journal[16]と呼ばれる Charlotte の日記である．

> October 14th 1836 I'm just going to write because I cannot help it. Wiggins might indeed talk of scriblo-mania if he were to see me just now encompassed by the bulls（query calves of Bashan）all wondering why I write with my eyes shut ― staring, gaping, hang their astonishment. [. . .] [W]hat in all this is there to re-mind me of the divine, silent, unseen land of thought, dim now & indefinite as the dream of a dream, the shadow of a shade. There is a voice, there is an impulse that wakens up that dormant power which in its torpidity I sometimes think dead.（*TA* 505）

奇妙なことに，Charlotte には目を閉じて小説を書く癖があったようだ．実際，原稿の文章が不規則に並んでいることから，Charlotte が意図的に目を閉じて書いていたと指摘する批評家もいる（Gilbert and Gubar 312）．視覚情報をシャットアウトし，内なる vision に集中している状態のことを，彼女は後にエクスタシーあるいはトランスと表現している（*TA* 495）．Gilbert と Gubar が言うように，Charlotte は本質的に“trance-writer”であり（Gilbert and Gubar 311），このようなトランス状態にあるとき，彼女は目を閉じていたはずなのだ．vision を研ぎ澄まそうとするとき，視覚情報は邪魔になってしまう．

このトランス状態は Jane にもあてはまる．前述のように，第 35 章で Rochester の呼び声が聞こえたとき，Jane は「何も見えなかった（I saw nothing）」と述べているが，このとき Jane はまさにトランス状態にあり，Charlotte がよくしていたように，象徴的に目を閉じて[17]vision に集中しているといえるのではないか．

同じように，Rochester もこのとき何も見えない状態である．もちろんそれは彼が既に失明しているからだが，彼もまたこのとき，トランス状態を共有していたと考えることはできないだろうか．言い換えれば，彼はこのとき一時的に目を閉じていたにすぎないのである．

先述のように，Rochester の失明を罰と考えるフェミニズム批評は，結婚後に彼の視力が回復する理由については，満足に説明できていない．単純に，このとき Rochester は視力を必要としていなかったと考えることはできないだろうか．この重要な瞬間，二人は共にトランス状態にあり，内なる vision に集中していた．そして vision の共有が叶うと，まるで閉じていた目を開けるように，Rochester は視力を取り戻す．つまり失明はゴールではなく，あくまで手段なのであり，Jane と Rochester にとってのゴールは「vision の共有」だったということである．

vision を「想像」の意味で捉えれば，vision の共有とは自らのイマジネーションを周りの人に伝えること．それは小説家 Charlotte にとっても，目指すべきゴールであったに違いない．

結

Charlotte にとって「vision の共有」とは何だったのだろうか．vision は「想像」，もっと正確に言うと，「想像の作り出した物語」[18]だとするならば，Charlotte にとって「vision を共有する」とは「物語を共有する」ことである．

そもそも Charlotte にとって，物語ることは元来共同作業だった．Brontë 家の子どもたちが幼いころに，Angria や Gondal といった独自のファンタジー世界を構築していたことはよく知られている．Charlotte は弟 Branwell とともに，Angria の物語を大人になるまで書き続けていたが，プロの作家を目指すにあたり，いったん空想に別れを告げなければならなかった．当時の文壇はリアリズムに傾いていたからだ．実際，Charlotte は Southey に「白昼夢（daydream）」に浸らないように，とたしなめられている（*SL* 10）．彼女はそう努力した．それは彼女にとって，以下に示す「ア

ングリアへの別れ（Farewell to Angria）」を意味していた.

> I have now written a great many books, & for a long time I have dwelt on the same characters & scenes & subjects. [. . .] But we must change, for the eye is tired of the picture so oft recurring & now so familiar.
> Yet do not urge me too fast reader — it is no easy thing to dismiss from my imagination the images which have filled it so long. [. . .] Still, I long to quit for a while that burning clime where we have sojourned too long. [. . .] The mind would cease from excitement & turn now to a cooler region, where the dawn breaks grey and sober & the coming day for a time at least its subdued in clouds.（Alexander 314）

ここで Charlotte は慣れ親しんだ光景から「寒々しい場所（cooler region）」つまりリアリズムの世界へと目を移さなければならない，と述べている．そしてこの言葉の通り，Charlotte は最初の小説『教授』（*The Professor*）を完全なリアリズムで書く．しかしプロの世界は甘くはなく，この小説が出版社に受け入れられることはなかった.

Charlotte はそれでも諦めず，続けて『ジェーン・エア』を書く．前述のように，この小説で Charlotte はリアリズムとイマジネーションを融合[19]させている．多くの人々に受け入れられるよう，vision の表現に試行錯誤した結果と言えるだろう．努力が実り，『ジェーン・エア』はベストセラーになった．つまり Charlotte はこの作品で，ついに読者と vision を共有することができたのである．Jane の求める“a power of vision which might overpass that limit”には，「読者の心に届く小説」という，作家 Charlotte の夢も重ねられているのかもしれない.

Jane が Rochester と vision を共有したように，Charlotte も読者と vision を共有することを望んだ．だから，Jane から読者への頻繁な呼びかけは，Charlotte から私たちへの呼びかけなのかもしれない．Jane が最後には vision を共有できる相手を探し出したように，Charlotte もこの小説を通し，vision を共有できる多くの読者と繋がることができた．これが「幸せな結末」であることは明白なように思われる.

注

1） たとえば，G. H. Lewis（1817–78，小説家，劇作家，批評家）は『ジェーン・エア』について「メロドラマ的で，ありえそうもない（melodrama and improbability）」（*SL* 91）と指摘している.

2） Schorer はこの声を「メンタルテレパシー（mental telepathy）」（Schorer 87）と揶揄している．「作者はヒロインに自活のための方策を探させようとはせずに，ただ超自然的な声を登場させて，それによって場面の転換をはかっている」（白井 119）といった厳しい指摘もある.

3） Eagleton は，Charlotte は妹 Emily とは異なり，主人公がどんなに情熱的に自己実現にひた走っても，社会的・道徳的因習には抵触しないように配慮していた（Eagleton 16）と分析している．Jane があれだけ自立を求めながら，結局は地主の妻に収まるという結末は，中産階級的な力強い反抗心とジェントルマン的な恭順で保守的な態度の間で揺れていた Charlotte の妥協点である，という考え方である.

　一方，Jean Rhys の小説 *Wide Sargasso Sea*（1966）が，Jane と Rochester の幸せな結婚に疑問を呈していることは明らかだ.

4） 観相学（人相学，骨相学とも）は，顔の特徴（鼻，口，目，額の形や位置など）からその人の性格を読み取ろうという学問．現在では否定されているが，19 世紀当時は真剣に取りざたされていた．この流行の背景としては，産業革命によって都市人口が急増し，異人同士，ひとまず互いの外形を徹底的に読むことで相手の人柄や気分を知ろうとしたことがあげられる（高山 95）.

5） Alexander and Sellers 参照.

6） 同時期の他のフェミニズム批評に Adrienne Rich による“Jane Eyre : The Temptations of a Motherless Woman”（1973），Elaine Showalter による *A Literature of Their Own*（1977）などがある.

7） 引用部以外でも，冒頭で Jane は Gateshead の窓際で外の寒々しい光景を眺めているし（*JE* 10），“power of vision”を求めるのも，Thornfield の屋上から遠くを眺めているときであった（*JE* 129）.

8） Gilbert と Gubar は Rochester の視力回復について「自然の治癒力（the healing powers of nature）」のなせるわざ，としか述べていない（Gilbert and Gubar 370）.

9） Jane は本心では Rochester の元に残りたいと思っていた.（[W]ith agony I thought of what I left. I could not help it. I thought of him now — in his room — watching the sunrise ; hoping I should soon come to say I would stay with him and be his.）

（*JE* 369）

10）本文中で言及しなかった三枚の水彩画の解釈について，以下に少し詳しく述べる．

三枚に共通する「輝く輪」のイメージに注目したい．一枚目の絵で Jane が可能な限り輝かしく描いたと述べている金の腕輪は，最初は不吉な海鳥の口にあるが，二枚目の絵では彼女を導く母の額で星の王冠に姿を変え，三枚目の絵では盲目となった Rochester を彷彿とさせる片目の頭のターバンの中に，白い炎の輪として現れる．この「輝く輪」を Jane の輝く未来の暗喩ととれば，Jane の運命は不吉なものによって危険に晒されるが，母なる存在に導かれ，最後には Rochester と共にある，というストーリーが見えてくる．

この「輝く輪」は最終章で Jane が身につけている金の鎖（*JE* 520）と無関係ではないだろう．Rochester が視力を取り戻したとき，最初に見るのはこの鎖の輝きなのである．Jane はかつて Fairfax 夫人と Adèle との幸せな時間を“a ring of golden peace”と表している（*JE* 284）．「輝く金の輪」は Jane にとって幸福の象徴だといえる．

11）というのも，vision に導かれて生きてきたのは Rochester も同じなのである．まだ西インドにいたころ，ある嵐の夜に，彼はまるで啓示を受けたように，ヨーロッパに帰ることを決意する．（A wind fresh from Europe blew over the ocean and rushed through the open casement : [. . .] [I]t was true Wisdom that consoled me in that hour, and showed me the right path to follow. [. . .] “Go,” said Hope, “and live again in Europe : [. . .]”）（*JE* 355–56）

12）Lowood 校と Cowan Bridge の Clergy Daughters’ School, Helen と Maria Brontë の類似は，Elizabeth Gaskell による伝記『シャーロット・ブロンテの生涯』（*The Life of Charlotte Brontë*, 1857）の中で既に言及されている．また，同伝記の中では Constantin Héger への Charlotte の恋慕は周到に伏せられているが，彼が Rochester をはじめ Charlotte 作品の男性主人公に強い影響を与えたことは多く指摘されている（たとえば木村 57–58 参照）．

13）Alexander and Sellers 参照．

14）Alexander and Sellers 参照．

15）Robert Southey（1774–1843）ロマン派の詩人で桂冠詩人の一人．

16）Roe Head Journal は Charlotte が教師として Roe Head 校に勤めていた 1836 年から 1837 年に書かれた 6 つの断片的文章．日記部分と創作部分が混在している．

17）Jane を導く vision はいつも，暗い部屋にいるときや眠っている（つまり目を閉じている）ときに現れる．「見えない」ことは，トランス状態に入るための必須条件なのかもしれない．

18）実際，Charlotte は Roe Head Journal の中で一度“vision”を“fiction”と書き間違えている（*TA* 504）．

19）リアリズムとイマジネーションの融合は，Charlotte の後記の小説『ヴィレット』（*Villette*, 1853）にも見られる．

参考文献

Alexander, Christine and Jane Sellers. *The Art of the Brontës*. Cambridge UP, 1995.

Alexander, Christine, editor. *The Tales of Glass Town, Angria, and Gondal : Selected Early writings*. Oxford UP, 2010.

Bellis, Peter J. “In the Window-Seat : Vision and Power in *Jane Eyre*.” *ELH*, Vol. 54, No. 3, 1987, pp. 639–52. JSTOR, www.jstor.org/stable/2873224. Accessed 16 Jun. 2016.

Bodenheimer, Rosemarie. “Jane Eyre in Search of Her Story.” *Papers on Language & Literature*, Vol. 16, Issue 4, 1980, pp. 387–402. EBSCO, http : //web.a.ebscohost. com/ehost/pdfviewer/pdfviewer? vid=3 &sid=395b9d39-0e5c-45b8-95fe-7d3af6e4a82d%40sessionmgr4007. Accessed 25 Oct. 2017.

Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*. Edited by Stevie Davies, Penguin, 2006.

————. *The Professor*. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 1998.

————. *Selected Letters*. Edited by Margaret Smith, Oxford UP, 2007.

————. *Tales of Angria*. Penguin, 2010.

————. *Villette*. Edited by Margaret Smith and Herbert Rosengarten, Oxford UP, 1998.

Chase, Richard. “The Brontës : A Centennial Observance.” *The Brontës : A Collection of Critical Essays*, edited by Ian Gregor, Prentice-Hall. 1970, pp. 19–33.

Eagleton, Terry. *Myths of Power : a Marxist Study of the Brontës*. Macimillan, 1975.

Gaskell, Elizabeth. *The Life of Charlotte Brontë*. Edited by Angus Easson, Oxford UP, 2009.

Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in The Attic : The Woman Writer and The Nineteenth-century Literary Imagination*. Yale UP, 2000.

Ingham, Patricia. *The Brontës*. Oxford UP, 2006.

Peters, Joan D. “Finding A Voice : Towards A Woman’s Discourse of Dialogue in Narration of *Jane Eyre*.” *Studies in the Novel*, Vol. 23, No. 2, 1991, pp. 217–36. JSTOR, www. jstor. org/stable/29532779. Accessed 29 Nov. 2016.

Rhys, Jean. *Wide Sargasso Sea*. Penguin, 2000.

Rich, Adrienne. “Jane Eyre : The Temptations of a Motherless Woman.” *On Lies, Secrets, and Silence : Selected Prose 1966-1978*, Norton, 1979, pp. 96–99.

Rigby, Elizabeth. “*Vanity Fair*—and *Jane Eyre*.” *Littell’s Living Age*, Vol. 20, Issue 252, 1849, pp. 497–511. ebooks. library. cornell. edu/cgi/t/text/text-idx? c=livn ; idno=livn0020-11. Accessed 11 Sep. 2017.

Sadoff, Dianne F. “The Father, Castration, and Female Fantasy in *Jane Eyre*.” *Jane Eyre : Complete, Authoritative Text with Biographical and Historical*

Contexts, Critical History, and essays from Five Contemporary Critical Perspectives. edited by Beth Newman. St. Martin's Press, 1996, pp. 518–35.
Shorer, Mark. *The World We Imagine*. Ambassador Books, Ltd., 1968.
Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own : British Women Novelist from Brontë to Lessing*. Princeton UP, 1977.
Sternlieb, Lisa. "*Jane Eyre* : "Hazarding Confidences"." *Nineteenth-Century Literature*, Vol. 53, No. 4, 1999, pp. 452–79. JSTOR, www.jstor.org/stable/2903027. Accessed 29 Nov. 2016.
Sutherland, John. *Can Jane Eyre be Happy? : More Puzzles in Classic Fiction*. Oxford UP, 1997.
木村晶子「コンスタンタン・エジェ ―― 妻子あるカリスマ教師 ――」『ブロンテ姉妹と 15 人の男たちの肖像：作家をめぐる人間ドラマ』ミネルヴァ書房，2015 年.
白井義昭『シャーロット・ブロンテの世界：父権制からの脱却』彩流社，1992 年.
杉村藍「『ジェイン・エア』における絵画的描写力」『名古屋女子大学紀要 58』2012 年．pp. 259–269.
高山宏「十九世紀美術史を映し出す鏡」『「ジェイン・エア」と「嵐が丘」ブロンテ姉妹の世界』河出書房新社，1996 年．pp. 84–97.
ブロンテ，C.『ジェーン・エア（上）(下)』大久保康雄訳．新潮社．2001 年.

The Power of Vision in *Jane Eyre* —— A Study of Charlotte Brontë's Imaginative Expression ——

Yuki KAWAKITA

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606–8501 Japan

Summary Charlotte Brontë's *Jane Eyre*（1847）has been accused of depicting Jane's behavior unnaturally and inconsistently. In particular, the scenario where Jane, who once left Rochester, suddenly hears his voice calling her out of nowhere and returns to him has been criticized strongly. These criticisms tend to be based on a misunderstanding of Jane's principles. This paper focuses on "a power of vision which might overpass that limit" that Jane yearns for in Chapter 12, subsequently hypothesizing that Jane desires the "power of vision" and her marriage to Rochester grants that desire. Conventionally, this "vision" has been comprehended as "eyesight," but this paper will explore other connotations ; "prophecy" and "imagination." These interpretations will demonstrate that Jane consistently follows mystical foretelling throughout her life and her development as a story-teller parallels the progress of Charlotte Brontë's own imaginative expressions. Jane returns to Rochester because he alone can share the vision with her ; this is rooted in Brontë's desire to share the vision with readers. Rochester's loss of eyesight should be interpreted as a means of sharing the vision with Jane rather than as a punishment for his transgressions.